

特249

283

# 府 豊 究 研 蹟 古

冊 二 第

百	千	瑞	龍	山
合	貫	光	雲	蔭
若	井	寺	寺	中
大	大	寺	と	納
臣	井	址	鬼	言
塚	戸	址	神	の
			社	墓
				(墳)

會 究 研 說 傳 蹟 史 土 郷



# 始





探訪日誌 (二)

この仕事を始めてから已に百日を超した。日数の経つのは早いものだといひたくなる。十月四日に山廻屋敷址を振出しに、もう随分其處此處と御邪寃になつた。同じ處に引續いて敬回も行って、思はぬお暇暮しと御迷惑をおかけしたこともある。けれども何處の方も皆、吾々の此の舉に對しては、厚い好意を持たれてゐることを感謝せざるを得ない。かくして吾等の机上には、研究材料が次から次と豊富に積まれて行く。そして埋れた古人の先蹤が置のはれる様に自ら明になつて行くところに、いひ知れぬ快感が伴ふと共に、公務の餘暇に行ふものが、聊かなりとも意義あるものになつて行く事を有難く思つて居る。

十一月十五日、六日 姫島行(十時)  
十一月二十二日 中尾氏別邸にて日根野文書、特にキリシタン宗關係のもの、山廻の遺物等を見、撮影(姥木、市場)  
十一月二十二日 石城川村に到り古蹟を探る(十時)  
十一月二十三日 八幡村白木の龍雲寺、鬼神を探訪(市場)  
十一月二十五日 圖書館にて書籍閲覽

(十時、姥木、市場、波多野)  
十一月二十九日 白木龍雲寺、安部仁市氏方を訪問(市場、姥木、十時、波多野)  
十二月一日 圖書館行き(同前)  
十二月四日 西大分町龍崎徳三郎氏宅訪問、同日由白木に到り輪馬調査(市場、十時)  
十二月五日 北町藤林氏來訪  
十二月六日 ト野寶成寺を訪問、同寺縁起其他につき調べる(姥木、十時、市場、波多野)  
十二月七日 三佐村行き、古文献捜索(十時)  
十二月八日 上野大友屋形址調査(十時、波多野)  
十二月九日 萬壽寺、來迎寺訪問(同前)  
十二月十日 萬壽寺、大智寺、寶成寺訪問(同前)  
十二月十三日 寶成寺訪問、同寺境内附近にある墓石と思はれるもの調査、其何物なるか今日迄未解決(姥木、市場、十時、波多野)  
十二月十四日 柞原神社で古文書研究(十時、市場)

十二月十五日 若宮神社、大友神社、府内天神の調査(姥木、市場、波多野)  
十二月二十八日 北海道郡大在村院摩氏宅訪問、同家所藏の古文書研究(市場、姥木、波多野)  
一月四日 瀧尾村富岡、泰兵藏氏宅にて同家保管の津守神社寶物一伯公遺物展覧、津守の一伯公屋敷址、曲の石佛等探訪(十時、市場、波多野)  
一月五日 別府市平太郎氏宅訪問、更に同日、森氏先達にて日名子太郎氏宅訪問、同家所藏の古器、古文書閲覽(市場、十時、波多野)  
一月七日 萬壽寺に大筋老師を訪ね、瑞光寺址、百合若大臣塚につき調べる(十時、市場、波多野)  
一月八日 雨を冒して萬壽寺輪藏址、瑞光寺址、百合若大臣塚等の調査(市場、波多野)  
一月十日 三重町伊東東氏來訪。春日神社訪問(姥木)  
寫眞撮影  
眞任木像、龍雲寺墓碑、鬼神祠、寶成寺金堂、同經堂礎石、栗ヶ山碑、弘法作不動像、春日赤童子畫像、中尾文書數通、詫摩文書數通、若宮手水鉢、山廻遺物  
(以上一月十四日迄)

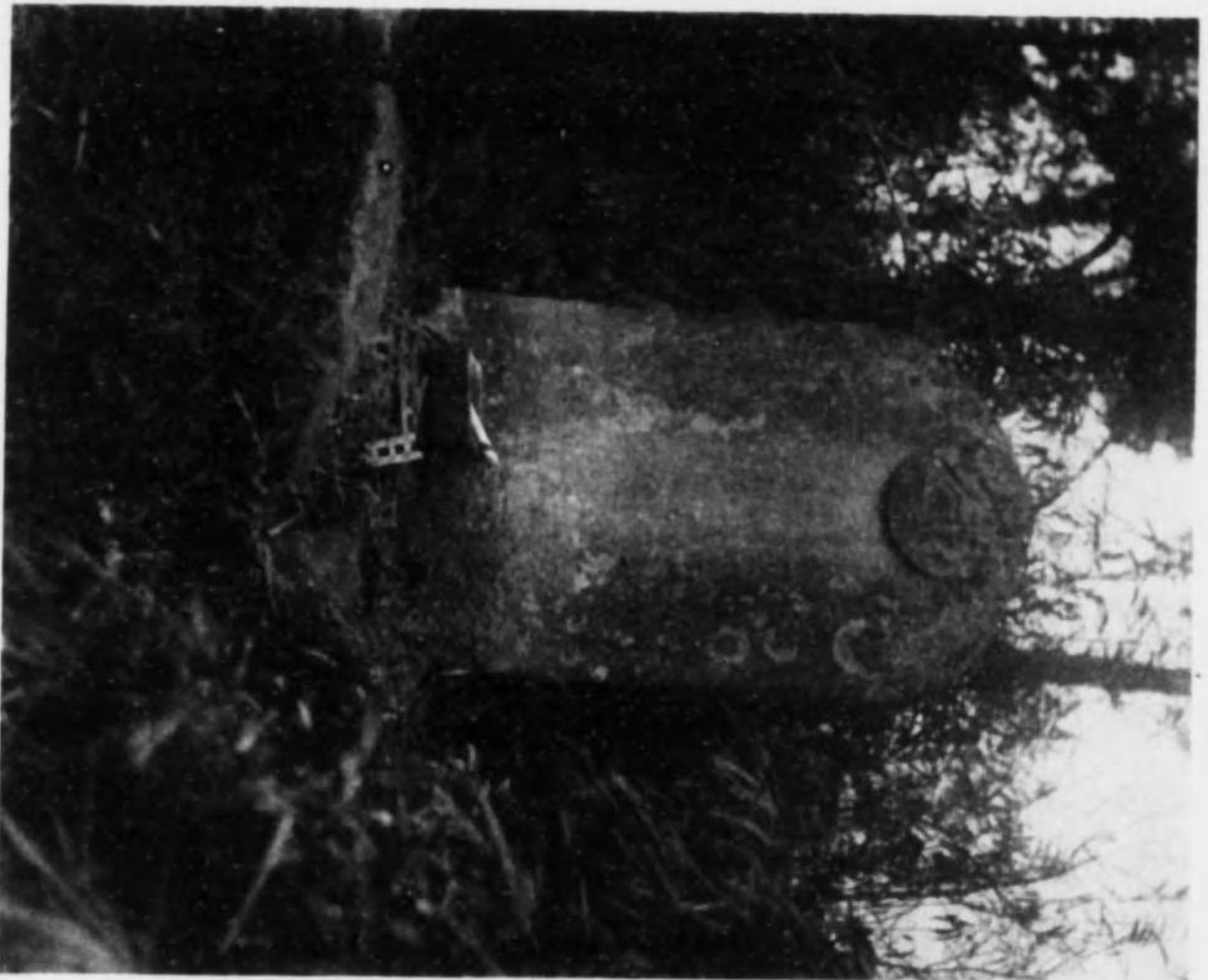


龍雲寺



眞任木像



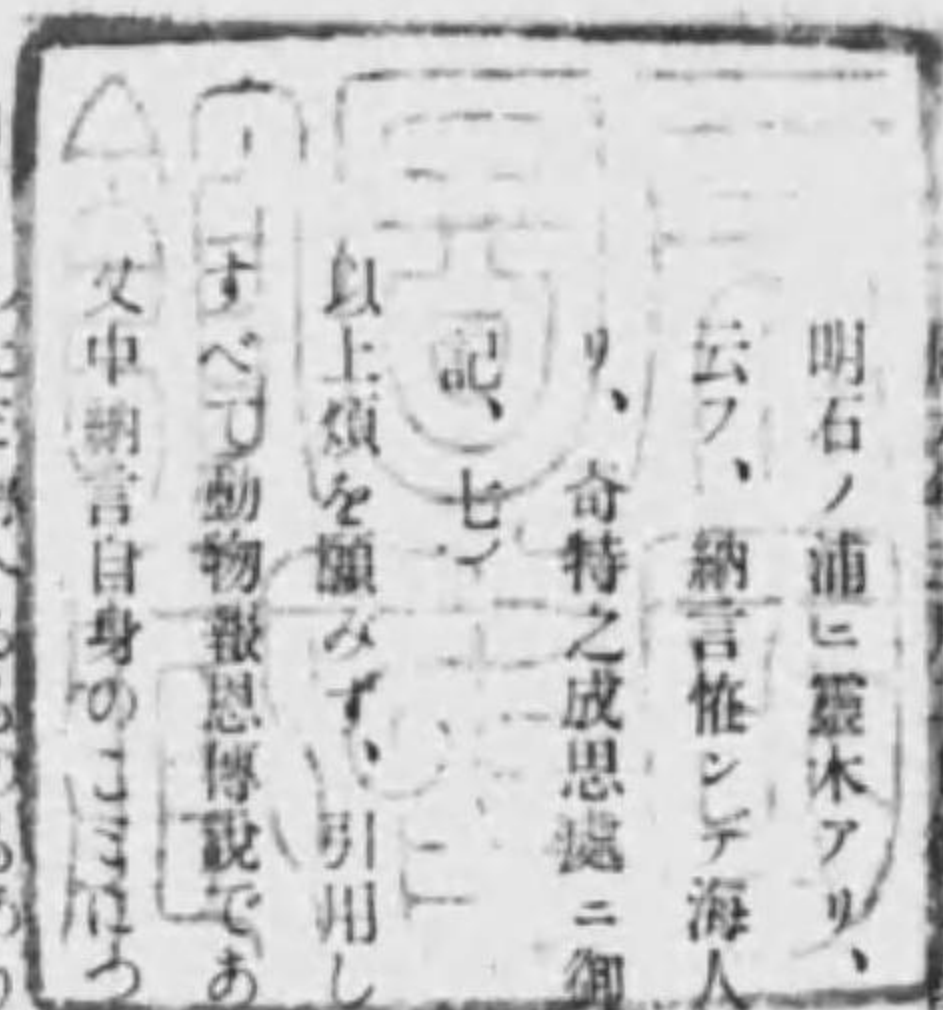


百合大若臣探の碑



瑞光寺址の蓮池





折簡海波嶮シク難助、父高房悲歎ノ餘に觀音ニ祈念シテ云ク、設ヒ決定應受ノ報也共、定業亦能轉ノ方便ヲ以テ再ビ我ガ子ヲ見セ給ヘト、千手觀音像ヲ造ラント云フ……(見龜に助けられること)……納言生長才能人ニ勝レ、朝家ノ譽世ニ越エ、元慶五年七月十二日幡州ノ守ニ任ズ同六年三月二日彼ノ國ニ下向ス、土民來リテ云ク、此ノ

明石ノ浦ニ靈木アリ、毎夜ニ光ヲ放ツ、人恐レテ成スト云フ、納言惟シテ海人ヲ語リテ取之、見ルニ三行ノ銘アリ、奇特之成思處ニ御井モ程ナク歸朝云々。(三國傳來記、七)

以上頌を讀み、引用した如く、諸書にも異説あれども「すべし動物報恩傳説であり、又多く繼見處の説話である。文中納言自身のことについては、九州に下り任滿ちて歸京したと傳へるものもあり、當地にある墓が随分怪しいものであることは勿論であらう。

**中納言墓に関する文献** 中納言の墓が真か偽かは論ずることは無理な話で、「豊後史蹟考」の如き、春日社頭の蓬萊丘を以て、これに擬してゐる。兎に角この墓に關して記せる文献は、

イ、豊後國志 ロ、雄城雜誌 ハ、中納言山蔭卿景譜

ニ、豊後史蹟考 ホ、大分市史

等であるが、殊に(ハ)には、中納言の家臣の後裔を傳へる井本氏のこゝ等に就き、日根野侯時代の興味ある挿話を附加してゐる。此には、イ、ロ、ハの文献を引用して置かう。

藤原山蔭墓 在笠和郷勢家村神宮寺側叢竹中、按中納言山蔭、左大臣魚名玄孫、十訓抄及盛衰記、山蔭赴鎌倉事、其來于豊、不知或任國、或配流、中傳無明文(豊後國志、卷四)

中納言藤原山蔭卿墳 (武家評林ニ魚名五代、武家評林ニ從三位中納言云々) 雜志曰、豊久町民家ノ裏ニアリ、此卿ハ左大臣魚名公ノ玄孫、父ハ正四位下越前守高房、母ハ中納言眞夏女、仁和四年二月四日六拾五歳ニシテ薨ズ、此卿ノ傳往々國志中ニ見ユ、又九州下向ノ事源平盛衰記及ヒ十訓抄抄ニ載タレドモ、當國ニ下向且薨セラレシ明文ナシ。

此地神宮寺ノ境内ニアリ、國寺舊圖中、南北十一間余東西十間余叢竹アリ、相傳テ公ノ墳所トス、寛政四年





住民庄二郎ナルモノ此地ヲ發キ壞シテ家作セシニ、祟害ヲ受タル話ヲ聞ケリ。(雄城雜誌、卷八)

中納言山陰卿景譜

謙足 不比等 房前 魚名 鷲取 藤嗣

高房 山陰 淳和帝天長二年乙巳生 母眞皇女仁和四巳二月四日卒

高房六男從三位兼民部卿頭藏人中納言清和帝貞觀中南都勸請春日大明神

山陰中納言者五十二世淳和帝天長二乙巳生勸請之節供奉仕者也

山陰中將察有勢家村於神宮寺側叢竹中山蔭左大臣魚名玄孫也

勢家者豐久町北側在叢中春日宮七十余間在神宮寺境外神宮寺園中半方有梅樹其數二百二十墳察惣地南北十一間東西十間余伊兵衛伊之助兩人竹叢ヲ切拂大道ニ致シ其址一家ヲ營住焉

山陰 有頼 在衛

- 公利
- 達長
- 言行
- 兼三
- 仲正
- 如無 (大僧都人海乘龜兒也)
- 女子 (右大臣定方卿妻)

正保二年九月

日根野織部正樣蓬萊御きづきのせつ「四市山にしょぶぎにかけさせられ御茶を御」あかり被遊候せつ御茶の水至てよろし「ければいづかたにあるか御たづねのせつ此ころ」山陰中將様の御察あり此わきに昔より「御家來すじのもの申て井の元源七郎」申者居申候此もの井水にて御座候外に「井申候は御座なき申上ければさて此」處には久敷家からの者あるか「御たづね」其後は常に御城より井の元源七郎が「水をこりまるれ御意ある故御茶の」節は度々汲に參候

よし嘯し傳に聞て「しるさいふ事をば前方きき居申候尤井の元」さいふは井戸の名にてはなしめうじ相見へ申候」 桶屋藤七

尙春日神社所藏の正徳三年四月に神宮寺賢治なる人の筆寫せる古地圖を見るに、この墓地附近一帶は神宮寺の西に連る竹藪で、中納言の墓さいふのも、殆んど現在の位置と思はれる所に記載されてあるから、現在の墓碑は從來の地に建て續いだものである。

井本翁の談 井本翁は墓碑銘文中に記せる中納言の家臣、井本氏の後裔ニ傳へ、永く現地に住居してゐる。此の墓に關して、大要次の如く語つたが、今の碑建設以前の有様は聞くこゝが出来なかつた。

今の煙火屋吉松氏の裏から當屋敷の北側一帶は昔大竹藪があり、墓石が澤山並んで居た。當家西側北に入る通路は十四五年前開いたが、其節井戸と中納言の墓とを約二間何れも東に移した。然し其傳を残す爲に、井戸と墓との位置、距離などには注意した。墓からは小壺が出たが、あまり調べもせず墓に關係のものだと思ひ、其の儘今の墓の下に埋葬して置いた。

中納言は料理屋業を創始した方らしく、目下全國二萬何千軒ある同業者が、或計畫をしてゐる様だ。去年春神戶の料亭組合取締入で、新聞營業者が來て、此の墓に參詣し、香華料を置いて、やがて組合での事柄が拂るこゝと思ふが、何卒後事をよろしく頼むと言つて行つた。

龍雲寺と鬼神社

海水浴場としての白木は砂濱遠く波靜である。が南に山を負ふ一帶の風光は何もなく陰慘である。部落の全家は安倍を姓とし、烏雄安倍宗任の裔孫ニ傳へられる。祖先創建の寶珠山龍雲寺を中心に、幾代かを續けて來たさいふのだから、傳説を知るものには一層の感慨を生ぜしめる。まして今の白木から國道、電車、汽車等を除き去つて考へればさうか、別府にも大分にも一度梓原に出でなければ行くこゝは出来なかつたのである。それこそ文字通りの別天地、安倍氏一族が水入らずの生活をしたであらう幾百年の歴史が、作りなしたる氣配である。往事を懐うて佇めば、限りなき感慨に耽るのも理ありと言はねばなるまい。私共は



神秘境白木の由来を、語り継がれた物語の数々によつて、明にしようと思ふのである。

**安倍貞任像** 白木電車停留場より南、山に向つて上るこゝ數十間で龍雲寺に達する。門をくゞれば先づ心殿窟(俗に貞任堂)があり、その堂内正面、高さ三尺、巾一尺三寸の宮殿型厨子の中に安倍貞任像が安置されてある。

厨子の扉及軒正面に〇に三ツ鱗の紋がある。像は木彫坐像彩色、高さ臺共に一尺八、像は七寸五分)直衣(上衣、尊白)風折烏帽子、右手に仲啓を把持し、左手は袖につゝ、まれて膝上にある。面貌は柔和圓満で眉目清秀、佛像式表現法を用ゐる、貞任の個性を出せるものと思はれない。近代彩色を塗りかへたため、古色を失つたのは惜しいこゝである。厨書裏書に、

豊後國大分郡白木之郷

寶珠峰龍雲寺現澤洲

維時 明和三乙酉年八月吉日

建立是者也

**傳貞觀開鑿岩窟**

本堂の西南方岩崖を削つて窟院をなし、大小二個を存する。(此の外窟の中腹等にも小岩窟が數

個あれどまゝなるは此の二個である。)

大岩窟は間口二十二尺、奥行最深所十七尺、高さ入口最高所十二尺七寸(但、現在は一時新小屋とした爲、東中地面は約一尺切り下げられてゐる。故に以前は十一尺七寸位なりと思はれる。)

小岩窟は大岩窟の西隣にあり、高さ約六尺、間口最長七尺奥行約七尺、殆んど半圓形にくりぬかれてゐる。大小岩窟ともに石質脆弱なる爲、セメント様のものを塗り、これを保護し、朱色を塗抹した痕がある。又大岩窟には天井に直徑五六寸位の穴あり、柱を差し込んだ跡らしく見える。

開山貞觀法師はこの窟を本堂として、佛像及貞任宗任の碑を建て、住したと傳へらる。開山は當寺に於て歿せられたとあるが察所は不明である。(開宗師談) 大岩窟内最西端に稍大なる釋迦坐像石佛がある。これは古いものではないがその背後の岩壁に光背の陰刻のあるを見れば、もこの場所に古き石佛を安置したものと思はれる。

その左方に龜塚と記せる小碑がある。元海岸にありしを持ち來つたといふ。尙此の外に小佛像や石塔が數基ある。(石塔のことは後述)

**大岩窟前六角型古塔**

塔は五輪であるが、全部六角であるのを特色とする。高さ臺石共七尺、地石に次の文字がある。

(第一面)

彌六孫

□三□(□二耶なるべし)

(第二面)

道光教

□重千代一

(第三面)

蓮 智上

勢 □増

□友 □増

(第四面)

次 □

次宗 第

宗光 席

(第五面)

宗次 安

宗吉 増

宗房 丘

(第六面)

文字なし

石面よく磨かれたれど、所々脱落し、讀み得る文字もあれ

き文意は通じない。〇印を附せるは或は人名かとも考へ、

當山安部秀山師に依頼し、安部系圖を搜索はしたが、結局時代等も推知し得なかつた。現住開宗師は、此の石塔は開山和尚の石塔ならんかと言はれたが、筆者案するに、貞觀建立の安倍一族の供養塔に擬すべきか、當山文書に「永徳三年八月初三日岩窟開貞任石塔造立」とあるに相當するものであらう。併し別府日名子太郎氏は「此の塔はたしかに徳川期のものである。斷じて古いものではない。」「と語られた。併し安部秀山師の調査によれば碑文第一面の三郎は河村三郎貞安なるこゝ安部系圖により立證さるこゝいふ。然らば貞觀の子であるから、相當に古いものである。或は古き貞任塔は崩壊して、後世之を改築したと考へるが穩當であらう。

**薩摩墓**

岩窟内及境内岩壁下等に相似たる五輪型小石塔多數存在し、近來本堂前廣場よりも多數發掘され、寺門の横に堀代用に積み上げられてゐる。これは薩摩墓と云はれるもので、之につき秀山師の談がある。

昔、石垣原合戦に大友方が黒田勢に包圍されて苦戦の折、大友救援の爲に多數の薩摩武士が押し寄せた。然る



に之を遠見した大友方は敵方なりと誤認し『敵勢粟粒の如く押し寄せた。』といつて皆自及してしまつた。粟粒の如しは多數の武士の遙か彼方より押し寄せたのを形容したもの。さて薩摩勢は救援後れたのを自責して、是亦割腹して相果てた。之が即ちその墓であるこの傳説がある。

貞任宗任位碑

本堂内に安置され、高一尺五寸

(表面)

寶山院殿月心常觀大居士(貞任)

珠林院殿中峰圓心大居士(宗任)

(裏面)

正徳二壬辰十月十三日

佛像

阿彌陀如來像 立像 金箔塗 高約二尺

現住開宗師の談に、開山貞觀法師將來を傳ふ。

本堂内に安置さる。

勝軍地藏像

木彫極彩色、白馬に乗り、馬上に半伽し、右手に錫杖、左手に寶珠を持ち、額に鍔形様のものを戴く、高さ馬共に約一尺、背光は戰輪、脇侍をして、向つて右不動明王、左に毘沙門天、彩色は近代の塗替を思はれる。

再中興 探道和尚禪師

二代を経て

現住 羽田野開宗師

龍雲寺草創

永徳三癸亥年八月三日(紀元二〇四三年)

後龜山天皇の弘和三年なり。今より約五百五十年前)貞觀法師の草創である。龍雲寺所藏文書に曰く、

抑々貞任九代末孫江洲三井寺圓舜僧都弟子也、生國江州

川邑、安倍一族引具、豐後州太分郡白木邑之處而居住、

永徳三年八月初三日岩屋間、貞任石碑造立、當寺開基拜

夫貞觀法師者當寺開山。

豐府紀聞に曰く、

其頃有比丘、名式部卿貞觀法師、受生於奥州、俗性人王八代孝元天皇裔、安部貞任十八代遠孫也、性絶倫而幼爲沙門、投三井寺、有習學博涉之譽、因精臺教兼聞諸宗、永徳改曆出三井寺遍諸州、同三年八月三日來豐後、大分郡笠和郷之海邊笠結島四百餘步海岸有清淨巖壁、貞觀監其地、請彫其岩壁成岩佛于府主、親世(大友親世也)許之於是貞觀於其海岸自成岩窟、彫刻岩佛並貞任宗任岩像及石塔、共安置其岩屋、即營寺住之、名寶珠山龍雲寺。

是につき同地安部政太郎翁の談によれば、翁の少時、此の像は海岸白木川口の西側大岩石上、石祠中に安置され、船の此の前を過ぐる時必ず帆を巻く。然らざれば必ず覆没する傳へられた。明治初年現在の心殿窟堂内向つて右側に安置したこ。

歴代和尚

當寺所藏過去帳三冊(内一冊は略本)により抄書、

開基 寶山院殿前中納言月心常觀大居士(貞任) 康平五

一月奥州於衣川戰

死行年二十餘才

珠林院殿前判官中峰圓心大居士(宗任)

開山 貞觀和尚大禪師 享保十八癸丑の年迄已三百五

中興開山 大智開山獨芳和尚大禪師 明徳元庚

前住 玄恩首座禪師 4八月

再中興 林西和尚禪師

再中興 月翁宗圓和尚禪師 寛文六甲午

再中興 天倫清樞和尚禪師 延享元甲子

再中興 高巖泰和尚禪師 安政元寅

二代略

(豐府紀聞)

「雄城雜誌」にも右ミ大同小異の記載がある。

寶珠山龍雲寺 境内 將軍地藏堂 貞觀師 安部貞任宗

任兄弟墳 師所建

雜誌曰、禪室にして大智寺の末也、當寺は永徳三年式部

卿貞觀法師の開基にして、其始は天臺宗の一徒たり。

此師は孝元帝の裔奥州の押領使安部貞任十八世の孫なり

初め沙門に成て三井寺に住し、内外の典藉博涉の譽高く

大友親世の招請に依て開基する處なり。近世今の宗派に

改む、或説に曰、元應二年常州鹿島より下向邑に住す。

(雄城雜誌)

康平五年貞任誅せられしより、永徳三年までは約三百二十

余年あり。故に貞任九代の末孫とあるは父子の世繼より見

て信じ難い。

安倍氏雜考

豊後に於ける安倍氏については、史實傳説取りまぜて色々な話がある。龍雲寺は宗任の創建なりともいひ、又随分面白い安倍系圖等も出来てゐる有様である。それで關係ある數項について考へて見る。



一、安倍宗任の祖先

宗任は康平五年源頼義に誅せられた安倍貞任の弟である。其の先は孝元天皇第一の皇子大彦命に出づる傳へられる。併し近來の歴史研究はアイヌ族の子孫であるといふに殆んど一致してゐる。委細の論証を省いて茲にはその結論だけをあげる。池田晃淵氏の説にいふ。

諸國の豪族往々自強を待みて國司を侮り貢租を輸さず、動もすれば對捍して亂階を啓く。中にも陸奥の夷、俘の酋。安倍頼時貞任宗任の父といふ者、其先は遠く齊明天皇の御宇に、蝦夷反す。依て安倍比羅夫を遣して、之を征討せしむるに當り、主として歸順し、從軍して功を立てたるを以て比羅夫之を賞し、且は馴服の手段として、安倍姓を與へしより、世々土着して俘酋となり、一族滋蔓して、最も富豪を極め、遠近の蝦夷皆其下風に靡くを以て、頼時に至り、漸く不逞を企て云々(平安朝史)

又武家時代に通曉せる大森金五郎氏は、始め安倍頼時は父祖以來陸奥の國に居り、俘囚長となつて勢が強大であつた。俘囚長といふは蝦夷の種族の頭で

任家任等并家屬、安置伊豫。朝野群載、扶桑略記係三月。

「藩翰譜」源融の子孫瀧口源太夫久始めて松浦に住す、其子孫松浦氏を稱す云々然るに世に傳ふるところには大いに異なり、凡そ肥前の國の侍に上り下りの松浦あつて其種姓各異り、上松浦といふは源融公の子孫であり、下松浦といふは平戸松浦も申す、是は陸奥六郡の押領使安倍頼時が男宗任法師が後胤たり、宗任源頼義に降し死罪一等を宥められて肥前國に流さる、其子孫續いて平戸といふ處に住して下の松浦と申せしなり、これ肥前守鎮信の先祖たり云々、されど古記を考ふるに上松浦の人々多くは一字を名のる源氏あれども、又二字を名のる源氏もあり、下松浦にも一字を名のる源氏あつて、上にも下にも近頃は安倍氏を見ねば、宗任が後の下松浦の流如何なりけん、後には夫も源氏を名のりしにや。

「豐薩軍記」卷三 貞任をば首を取り宗任をば虜にして都に召連れ上り玉ふ、貞任が長さ六尺五寸、宗任は六尺四寸ありける……宗任は勅許を蒙り、信濃國を賜はりしが、彌野井と戦ひ討死す、其子を出羽守惟任といふ、惟任に三子あり、嫡男信濃守貞昌、二男右近太輔宗仲此宗

當時矢張り蝦夷種族の重なるものを以て之に任じたやうに見える。……一体安倍氏は大彦命の後裔であるといふ系圖もあるが、系圖といふものは後世の偽作が多くて、容易に信用を置くことは出来ない。近時の調査に依つて見れば、安倍といひ、又出羽に於ける清原氏といひ、何れも皆アイヌの種族であつたやうに思はれる。即ち之は熟蝦夷で、臺灣に於ける所謂熟蕃なきに云ふやうな者に當るであらう。夫を朝廷で追々優待して官位を授けられ、蝦夷の地は蝦夷人をして治めしめるといふやうな御方針を採られたので、かゝる強大な輩が出来たもの、やうに思はれる。(大日本全史)

二、宗任は果して豊後に下つたか

頼義に降伏した宗任が後義家に心服してゐたことは國史の示すところであるが、最後にさうなつたかは諸説紛々として定め難い。

「大日本史」卷四十二 七年甲辰 平春三月、伊豫守源頼義以「降虜」至。自「陸奥」、朝議不許「降虜」入京。扶桑略記 二十九日乙丑、官符降虜安倍宗任正任貞

仲は彌野井小彌太と戦ひ討死す、三男右衛門佐氏任は平山景房が家を繼ぐ、貞昌信州に在て國家を騒動させしむる故、筑紫肥前國へ被移子孫繁榮して今にあり、安倍松浦小佐井黨の三姓は是なり、貞任が子五人ありけるを常陸國へ配流せられ、三男家を相續し鹿島を賜り、安部名字を削られ守江と名乗る、五男は豊後國大分郡に來り四極山の東、田の浦と云ひける處に、廠を構へ江守と名乗り、後に守江と云ひけるが、宗任信州に封ぜられしより再び安倍と名乗ける、一子貞觀を生ず、貞觀後に遁世して貞觀法師と法號し、龍雲寺と云ひける院宮一宇を建立し、貞任が墳墓を築き孝養せり、龍雲寺と號せし事竊に是を慮るに母の龍子の故なるべし貞觀より又三世して安倍實任と云ひけるものあり。此實任が熊野山東岸寺をたつるに後出

「豐鏡亂記」卷中 兄貞任は誅伐し、弟宗任をば生捕にして都に連れ上り給ひ奏聞有て、宗任は筑紫豊後國に流されて當郡に在住して子供數多有りけるが、末葉に在りて安倍三郎實任といふ者云々。次に熊野山東岸寺創建のこと

「前太平記」卷三十四 左馬權頭源義家朝臣……永保三年六月陸奥軍鎮守府將軍にぞ補せられける、……



爰に奥州の降人安倍宗任は、去ぬる比より義家朝臣の郎等となりて、無二の忠功を盡し、二十年の給仕怠る事なく勤めけり、然るに奥州は彼が本國なるに、今度の御供こそ然るべからぬ事よき人々傾き申けり、將軍義家斯く聞給ひ、實にも宗任に於て野心の色なしと雖、奥州にまで召し具さんは、思慮なしと人の思はん處もありて、即宗任を召して宣ひけるは、さても汝我に仕へて、他事なく忠を盡す、感悦甚だ淺からざる處なり、然るに今度奥州の任に着きて不日に下内せん欲す、汝をも召し具すべけれども、汝が本國にまで具せんことは、人の反思はん處も有れば、今度の供には具すまじきぞ、但し義家が心に於て、努々汝が胸中を疑ひて斯云ふにはあらず、唯世の人口を思ふが故なり、之に依つて先立て奏聞を經筑紫の松浦の内にて、汝が一所懸命の地を申賜りぬ、早く彼處に下りて領知すべし……宗任も辭するに詞なく……其後宗任松浦に下りぬ、此より先渡邊綱が孫小源二正彼處に住居せり、されば此正宗任の二人が子孫、松浦黨にて繁昌せり。

「平家物語」劍の巻にも亦筑紫に下り、子孫松浦黨あり

に金口の説經を尊み讀誦したりければ、父母の寵愛淺からざりける、獨り深窓の下に年月を送つて秋の夜の長き折から燈の影に古き文なき見てるたりけるに、年程二十四五計り見えて、立烏帽子に水色の狩衣着たる男の、最またをやかに美なりけるが來て、花の御本の傍へより種々物語り、慰め語らひけるに雖、更にいなせの言もなく歸りぬ、男夜な、通ひけるほきに、榻の端垣數々に往き來るさの言の葉の、色々亂る、思ひの露、わりなき心に引かされて登れば下る船舟の、いなにはあらぬ情の道、千年をかけて契り玉へば、階老比翼の被の下に、早や懐胎の身となりぬ、人目の關もつ、ましくも、結ぶ下紐いみ深く、包むすれき彌増に、其綻を奈何にせん、父母是を聞き大に驚き如何なる人に見けるぞと、再三強て問ひけるに、來るを見れども、衣々の別れ路には何ぞ思ひやる方もなくて、行方をも知り進らせずとぞ答へける、母も不審に思ひ、またもや其人來りなば、朝歸りせん時、印を著て行末を尋ねべしとぞ教へける或夜彼人來りければ何よりも猶むつましく語り、教の如く草牛卷に糸を著て狩衣の裾にさし糸をしるべに慕ひ行

右の如く宗任が豊後に下つたといふことは多大の疑問があり、従つて龍雲寺創建のことも疑問である。熊牟禮山東岸寺（大分郡南庄内）縁起にもあるさうだが、夫によつて斷定するのも危険であらう。猶宗任は豊後國四徳田の莊司大太夫の一人娘花の本と婚姻し、一子大神朝臣惟基（巖大彌太）を得たといふ話もある。之は巖嶽の神婚傳説と宗任を結びつけたので、從來の、豊後に蟠居した緒方一族は大神良臣より出づといふ説を覆さんとするものである。

「豐薩軍記」竊に佐伯氏の系譜を考ふるに、巖嶽大神を祖神と崇め奉る、抑鷓鴣草葦不合尊の御母、豐玉姫と申すは、海神の娘にて、神武天皇の祖母たる故に、天皇是を巖嶽大明神と崇め玉ふによつて、山を祖母山と號す、されば神威蒼天に高く靈光巨海に深し、……巖に豐日の塚ありて、石廟日向の内に據ける故、世に是を日向の巖嶽と云ふ、祭祀を豐州より爲せば、豊後の山とも稱すこかや、豊肥日の三州に蟠根たる大山なり……茲に天皇五十代桓武天皇の御宇に當りて、緒方庄宇田村に大太夫と云ふ富宏の者あり、一人の女を持つ、其名を花の御本と申て容顏美麗雙ぶ方なき粧ひ、殊に才智明惠にして常

けるに、巖嶽の麓窟の裡豊後の神原といふ處にありにぞ引入けるが何ぞは知らず苦しげに喚く聲こそ聞へけれ、乃ち是に立よりて、此穴の内には如何なる者の居けるぞや、又何をか痛く呻吟するぞと有ければ、穴の内より我れは是花の御本の許へ通へる者なり、契りも今は縁つきて、此巖嶽の下に針をさ、れたり、大事の疵にて痛み甚し、我本身は地なり、有りし形ならば出て見えられ度くこそあれ共今は化すべきことも叶はず、本の形は恐れ玉ふべきなれば出でぬなり、世に名殘惜しくこそ覺ゆれ、是迄來り玉へるこそ忘れ難しと云ひければ、姫の曰く、縦へ如何なる御姿にてもあれ、年月添ひ馴れ進らせたるに、一目見參らせずしては争か歸り申すべき、露恐ろしいと思はずとありければ、姿を見せ申さんにて、窟の中より這出たるを見れば、誠におそろしき大蛇なるが、眼は銅の鈴の如く、口は紅を含めるに似たり、頭には髮生て、角を戴き耳を垂たり、され共形には似ず、双眼に泪を浮かめ、頭計り指出しける、供に具したる十余人の女房肝魂も身に副はず、我先きにぞ逃たりけるが、道にて二人死したりけり、老婆の宮松の宮にて今にあり、姫も恐ろしかり



しかども、日來の情のわりなきに立ちやすらひておはしけるが、衣を脱て大蛇の首に打懸て願の下なる針を抜きぬ、其時大蛇、我れ在二大海一者八大龍王の其一つ柄山者廻嶽大菩薩なり、汝既に懷妊せり。必ず男子なるべし、早五月になりぬ、若し十月にして顯れなば、日本國の大將なるべかりけれども、五月にして顯れぬれば、九國の内にて弓箭打物取ては肩を双ぶる者あるべからず。氏は大神、名は太々、諱は惟基と號すべし、守の爲にきて岩屋の内より太刀一腰出しにけり、……斯くて五十二代嵯峨天皇の御宇、弘仁二年辛卯三月五日一男子を誕生せり、成長するに隨ひ、器重骨柄人に勝れ、福智共に足り、心賢にして學ばざるに諸藝を知る、七才にして元服し大朝臣大太師惟基とぞ申ける、跳にて山野を走り行けば、足には賊常（あがら）に割ければ、賊太夫共云へり。

此の大蛇が即ち宗任といふのである。又宗任は百合若大臣であるとし、その妻眞百合（前松浦の渡邊久の長女で、花の本死宗任の妻と云ふ）は傳説の鷹の縁丸だといふ話があるが豊後の有名なる百合若傳説をこりこんだ随分奇抜な説である。百合若のこは本誌別項に詳述

してあるから茲では略するが、要するに廻嶽の大蛇も百合若大臣も或は宗任であるかも知れぬ。たゞ吾々の歴史的常識をかけはなれてゐるので、奇抜といふより外に感想は起らぬのである。

貞觀と白木

龍雲寺の記録によれば、貞觀は江州に生れ、一族を引具して豊後州大分郡白木に來住したこあり「豊後録記」によれば、宗任の兄貞任の第五子が大分郡に來り住し、其の子が即ち貞觀といふこになつてゐる。或は貞任九代の末孫といひ、或は貞任十八世の遠孫といふ。一説には、「宗任豊後に來りて先づ龍雲寺を創建し、其子實任は熊牟禮山東岸寺を建立し、實任十三世の孫に貞次といふ人あり、元弘三年大友氏に従つて上洛し、同年五月六波羅を攻め、地を江州の川村に賜つて川村五郎と稱した。

（貞次は後醍醐官軍に關し、楠木正行に従ひ平三年正月飯盛山麓に戦死したといふ）此の貞次の子が貞觀で、三井寺に入り僧となり、弘和三年八月十五日、亡父貞次の生國豊後に歸り來つて、白木龍岸寺の廢墟に住するこ十二年、やがて大友親世の許を得て龍岸寺を再興して、寺名を龍雲寺と改め時世に順應して天臺宗をも改めて禪宗（臨濟宗）と名した

といふ。（安倍宗任と緒方惟実一による。）然るに、龍雲寺阿部秀山師が同寺古文書によりて調査したところによると、前記貞次は良觀の子で、貞次の子は貞安となつてゐる。同師が安信系圖等と對照して研究した結果は頗る詳密であるが、茲には其大要を録する。

貞觀式部卿一永仁五西年江州河村に生れ式部卿と號した十九才の時一子を設けたが産後の妻を失ひ、無常を觀じ、一子五郎を父に頼み同國園城寺三井寺に入つて出家した。時の座主圓舜大僧都を師として佛道を修學するこ大凡廿四年、天臺顯密兼備へ其名は天下に振うた。因て貞觀法師と改め永徳改曆三井寺を出で、諸國を遍歴し、同歴の始め讃州に錫を止め、其後豊後國大熊山に來り住するこ不久其内大分笠和の郷の海濱に笠結島といふ斷崖地壁があり、それより西四百歩の處には、海岸蘆草を臨んで清淨無垢の靈巖立壁があつた。貞觀法師は海岸を徜徉して其地を占監し、その靈巖を彫刻し天然の岸佛數体を形成した。時は豊後の太守大友親世の時である。貞觀法師太守の特許を得て白木村に一字を創立し寶珠山龍雲寺と號した。境内の岩窟に厨川鳥海の碑を建立し是を心殿窟と名付けた。時に永徳

三年八月三日であつた。別堂に貞任東帶の正像を安置し（之が今の心殿窟）諸人に參詣を許した。至徳二乙丑八月三日西方に安座し稱名を稱へつゝ、安寂した。命壽八十九才であつた。

安倍氏の來住と白木の發展

貞觀についで來たのは河村二郎貞鎮（後に佐賀關原早吸正女神社の社司に補す）外同姓七八人、次は河村三郎貞安（貞鎮の子河村五郎貞次は正和四年誕生父貞觀出家せしにより祖父貞鎮に養育せられた。元弘三年南朝の勅命によつて江州河村を賜ひ、大炊頭になされた。正平四年楠木正行に従ひ河内飯盛山麓に討死した）で、應安三年南北の合一なり、小身の諸士は領地を悉く沒收された。因て江州河村の領地を離れ永徳の始め妻子家從を引具し、豊後白木村に來り住し、應永卅年癸卯白木村に卒した。（河村の姓を改め安倍とす）次は河村新太郎貞氏で、永徳年中父祖一同白木村に來住した。應永七年に大友親世から、名家たるこ心殿窟貞任石碑の木像等靈驗あるによつて白木四浦を賜はつた。

白木は四極山の東麓でもこ戸數漸く十八九軒、高も五十四石計であつたが、龍雲寺創建以來開山村民に利用厚生の道を授け、夫より次第に繁昌し百余石の高となり、村民は



其鴻恩を追慕して例年八月三日開山の祭典を執行し、次に厨川島海兩人の石塔を祀る。祈るに靈驗あり時に碑から水を噴出するといふ。大旱の時は心殿窟内貞任の木像を四極山の海邊灣曲の處に護送して祈願するときは古來より靈驗があつたといふ。

安倍氏の一族が江州より白木に移住せることは是は確かなる事蹟である。何故に白木といふ地を選んだか、父が宮方であつた關係か、或は安倍貞任宗任といふ風變りな先祖を持つ一族が、安住の地とするためか、世を忍ぶのか、世にすねたのか、貞觀來任の緣故によるのか、何れにしても別天地を必要としたからであらう。序説にも述べたやうに一族水入らずの生活は祖先を中心に幾久しく續けられたのである。地勢から察するに、安部氏の系圖を持たる、こいふ白木安部仁一氏宅の附近は、南方もや、開けて、傾いた冬の日にも終日浴する、ここの出来るところである。恐らくこ、らが草分けの地で、是からズツト西の方に延びて白木一帯が安部氏の居住區域となつたと思はれる。龍雲寺大岩窟前の石碑は安部氏の一族が祖先追善のため建てたものに相違あるまい。

### 創建後の龍雲寺

同寺文書に曰く「夫レ貞觀法師禪法ニ歸依シ、天臺宗ヲ改メテ禪宗ト爲ス、法師ヲ改メテ貞觀和尚ト改ム、當寺開山トナル、應永元年戊午ヨリ玄恕首坐二十年住持ス、其ノ後無住ニシテ衰頽セシテ、永祿七甲子年林西和尚更ニ之レヲ中興ス、其後中絶セシテ寛文六丙午年宗圓元中興ス、其節金鏡山大智寺ヲ中本山ト爲ス也」云。寺なごも小さく至つて微々たるものらしかつたが府内城主日根野織部正吉明（寛永一明曆）の時や、面目を新にした。同時文書に、

古來有小院、或時火災燒失中絶、其後府中太守織部正御茶屋御寄附ニヨリ而、方丈ニ用ヒ、其後鳥目ヨリ小菴引方丈移ル。  
方丈再興主天倫先師並壇信協力誠有餘資諸以余力再建者也

于時享保第六辛丑歲仲春吉日  
心殿窟も火災後中絶してゐたのを、日根野時代に再興したのである。

かくて現住閑宗師に至り、昭和二年本堂を改築して、以て今日の輪奐の雄偉を致した。

### 鬼神社

龍雲寺本門を出でて數歩、爪先上りの臺地に鬼神社がある。天満天神の向つて左の方、本殿は間口六尺、奥行四尺四寸の土臺上に設けられたる木造流れ造り、拜殿は方二間、凡て繪馬を以て滿されてゐる。（繪馬の事別項）此の鬼神社にも龍雲寺の南側の山上にあつたもので、それを明治十年頃現在の地に移したのである。龍雲寺の門にそつて山上に登るに、羊腸たる急坂は、正に先なる人の踵を項くほぎ、二町余りて鬼神の舊祠に達する。

土居の高さ二尺五寸、祠は全部石造で高さ三尺七寸、間口一尺八寸、奥行一尺七寸、前方に燈籠一基あり。土居の前に方一間位の平地、その下にも平地がある。大体三段になつて居るが、夫より下は竹叢の裡に山徑の痕があり、岩を削つて段階が拵へてある。

此の舊祠につき白木村安部守太郎氏は次の如く語つた。  
舊祠の下の平地には御殿、その下の平地に拜殿があつた。自分が十四五才の頃之を下に移した。（現地）こゝにあつた御殿は現在の鬼神社の拜殿と同一のもので銅葺きであつたが盜賊のためはぎ去られ今はトタンが張つてある。御殿下の平地はもこの拜殿のあつたところで當時方

一間であつた。現在の地に移すとき方二間に大きくした。御神体は御幣丈であつたが下の社地を擴張するこき椋の木の下から土製の鬼面を掘り出したので是を御神体とした。この舊拜殿址から眞直に百段がつゞいてゐた。眞直な急坂で今日でも其の跡は歴然としてゐる。今の此の道は古來村人通行用のものである。もこ參詣は御殿に對してするので現在の石祠ではなかつた。古くは石祠に參詣したのだが靈顯いやちこなので其の前に御殿や拜殿を設けられたのであらう。

さて鬼神社の御神体は鬼面であるとして、近來祭神は大己貴神となつてゐる。大己貴命と鬼と何の因縁があるのか、是は一向不明である。鬼神社については記録も一切無く古老の口碑にも傳はつてゐない。前出「安倍宗任と緒方維榮」の中には次の如く説明されてゐる。

宗任の母新羅（新羅の名は新羅の母より起る）は辰の年辰の月辰の刻の生れで幼名を龍の乙女（龍雲寺の龍の字はこいつたの母の名に因む）宗任は母の亡後に祠を山上に建てたが、夫を鬼神といふは、さすがの宗任も母の前へ出れば全く別人の様におこなく、豊後の士民は宗任よりも強き其母は鬼神以上で



あると評判してゐた。鬼神祠の名は是から起つたのであらう。

### 鬼神社の繪馬

土俗鬼神社は頭痛の神様と稱し、病人は鬼の小繪馬を奉納して平癒を祈る。堆き鬼神社の繪馬を漁るに、中に頗る逸品がある。現今は白木電車停留場側の茶店で賣つてゐるが、遅拙で到底數年前のものとは比すべくもない。店主は數年前轉住し、繪馬は他より取次販賣をなし、近來は此の店でも老爺が執筆して販賣し又版木にも起してあるといふ、よつて數年前執筆してゐたといふ老婆の家を訪問した。

この老婆は名を安部クマミといひ六十三歳である。その談話の大要を左に録する。

此の繪馬は明治初年頃から始めたもので、最初は杵築から來て、隣に住んでゐた人(名は忘れた)が始めたもので、この人は元來は人形屋であつたミカ、非常に器用な人であつた。この人の描いた繪馬は彩色のもので、黒で描線を描き、中に赤を塗り角を黄色とし、其他青色紫色等をも用ゐる、随分立派な畫であつた。角は牛の様に細長かつた。その太さは現在と同様であつた。私は二十頃此の家に嫁

に來たのだが、男と共に隣の人の繪を見て真似て描き出して賣つた。その後男は死し自分丈がこれを描いてゐた私の描く繪馬は少しは自分の創意をも加へたので、隣の人の描いてゐたものは相違がある。久しく執筆し、他から百二百の註文を受けても寸分違はぬのが出來てゐた然し昨年昭和四年頃から中風のため手がふるへ、少しも描けなくなつてしまつた。

クマ女は病氣のため腦力や、疲れ居り、記憶もうすらぎ思ひ出せぬこもあつたので、息子や嫁の助言したところもある。

筆者はクマ女ミ種々物語つたが、クマ女は非常に感激し筆者の差し出した紙に思ひ出の一筆を揮はんとして視を取り寄せ、ふるふる手に筆を採つたが、さうしても筆が進まない、位置さへも定めにくい有様であつた。息子や嫁は側に在つて、大いに焦慮し色々手もつくし激動もしたが、遂に畫を成さずして止んだ。時に夕闇漸く迫り、燈火ほのぐらく、加之寒風吹きすすんでゐる。老婆は心中限り無き寂莫を感じたもの、如く、唯「まここに涙が出るばかりだ」ミ一言を洩らした。此上老婆の神經を刺戟してはミ、筆者

は慰めの言葉を残して辭去した。それより息子と共に鬼神社に行き、薄暗い社殿を模索したが、最古のもののは得るに由なく、唯老婆の筆になれるもの二枚を頂いて歸つた。社殿の繪馬は余りに多いので始末に困り、古いものは皆焼拂つたところがあるので、その節古いものは亡失したものと思はれる。誠に惜しいことである。

### 鬼神社の繪馬に就て

小繪馬の分布少い九州、殊に豊後に於いて、かうした繪馬の存在するのは大いに嬉しいことである。この繪馬はその形に於て小繪馬中の最小のもので、河内のある天神社のものにも同じ大きさがあるが、こにかく余り例は多くない。此の繪馬の面白いのは大きさよりもその畫風で、前記老婆の話中にある創始者の畫風は知るに由ないが、老婆執筆のものを見るに、永年の練習の結果筆法畫風固定し、極度に簡略に、而してグロテスクな氣分洋溢せるものである。殊に顔面の輪廓をも省きたる点なまここに洗練されたものである。

この繪馬もクマ女の病氣によりて廢れ、後繼者はあつても畫致なき俗品で語るに足らぬ。かくして無名の民間藝術も知る人もなくて滅び去るのであらう。

## 瑞光寺址

### 上野高商の下

を東に入つて二町も行くに、今大湯線が急カーブをして南方に迂回しようとしてゐる。この線の東北近くの田圃中に、一本の老松が亭々として聳え其樹下に一軒の農家が建つて居るのを見るであらう。そこから井手に沿うて、だんだら路にある線路をふみきつて下るに其家の傍に出る。家主佐藤由雄氏は、數年前此處を宅地として住宅を營んだのである。前庭を横通して既舎の裏側(西)に出るに、先に見えた松は、小さな丘の上にあるこもこもが分り、其の丘を南にし、佐藤氏の家を東にして小さな池を見出すこもが出来る。此の池が傳説に名高い萬壽池が身投をして百合若大臣の妃を救はれたといはれてゐる。

### 萬能池、蔭池

であるこもこもされて居るのである。周圍約百二十尺餘、池中には蓮が叢生して亂立し、水は最深所に於て三四尺、岸には家に接して李、河楊、茶葉等が無風に臨んで居る。池の西側、松樹の聳えてゐる小丘には

### 大友親世之墓

がある。總高八尺五寸の五輪之塔で



安山岩で揃へた近代のものである。水輪表面に

大友親世公墓

とし、其裏面には

應永二十五年戊戌二月二十五日逝

ごあり、地輪の表面には

應永廿五年建設石碑

天正十一年之戦役因之破壊

明治十一年八月再建

側面には

專任 吉岡爲儀

利根玄壽

世話人 古城伊三郎

同 姓 中

橋本同姓中

利根同姓中

ミ明瞭に彫りつけられて居る。今此の塔について見れば正しく大友第十世、中興の明主親世公は歿後此の土地に葬られたかの様に思はれる。歿年の應永二十五年なる親世公の石碑が、同年に此の池畔丘上に建てられて居ることを明記

して居る點は誠に面白いといはねばならぬ。この親世公は歿後、大野郡野津寺小路に葬らる、といふことを嘗て筆者は聞いて居るのであるが、未だ實際の研究調査もしてゐないので果して何ういふことは出来ない。假にそれが事實であるなら、親世公の墓は二ヶ所にあることになる。いづれにしても此の小池の一邊、小丘上に堂々たる石塔が今かうして儼存してゐることについては謂れのあるべきこと、せねばならぬ。此の蔭池は即ち

瑞光寺之池、白蓮池

で親世公は關係の最も深い瑞光寺境内中のものである。此の上野丘の東端、今の小池ある一帯は、舊瑞光寺の址であるが、今では殆んど顧みることのない寂しい土地になつてしまつて居る。舊府内の古地圖は「大分市史」にも載つてゐるし、南新地那賀榮治氏も所有して居る。(之れも殆んど同一のものが豊饒の安部貞二郎氏の許にもあると聞いて居る。)之れについて見るに、大臣塚の東北方、舊萬壽寺に接して、瑞光寺があり、白蓮池が記されて居る。舊記を按ずるに、

大守親世、曾崇不肯受學禪法、故府主於万壽西境改營精

舎、請不肯受和尙爲初祖、附食邑、名大寶山瑞光寺、貞治五年丙午二月八日不肯受寂。(豊府紀聞)

大寶

新豊山瑞光寺 雜志曰當寺ハ禪宗妙心寺派ニシテ近世万

壽寺ノ住僧退休ノ地タリ、開基ハ貞治年中不肯受禪師也

始蔣山直翁師ニ隨テ佛心宗ヲ學ビ、東福寺ニ住シテ、道

徳世ニ高シ、大友修理大夫親世迎テ禪法ノ師トシ、精舎

ヲ營ミ、不肯 貞治五年 二月八日寂 ヲ以始祖トシ、若干ノ食邑ヲ

寄ス、其後天正丙戌ノ亂、堂宇槐墟ス。(雉城雜誌)

「紀聞」の云ふところ「雉城雜誌」の云ふ處、其山號に於ては異議もあるが、兎に角此の瑞光寺は貞治年中、今より五百七十餘年前に、開基親世によつて不肯受禪師が開山となつたことが肯かれるのである。然るに

瑞光寺在笠和郷六坊村、大友氏時所建、以不肯禪師爲開祖。(豊後國誌)

といふ意見の記録もある。「豊後國誌」は更らに「豊饒善鳴録」「豊府紀聞」を引證して開基を大友氏時ニ推論して居るが、吾等の見るところでは、其推論は或は何かの誤りでないかとも思はれてゐるのである。ところが一日「禪餘集」(寶永元年寫)を見るに、ここが出来たのであるが、同書に

瑞光寺 大寶山瑞光禪師使大友修理ノ大輔親世之所創建也、開山乃佛印大弟子不肯受和尙也。

とあるによつて考ふれば、親世公の開基であることは疑ふべくもないこと、思ふ。又「雉城雜誌」に山號を異本にては大寶山と特に註して居るが、これも新豊山でなく、大寶山であるのかも知れないと思はれるのである。しかし此の山號については尙不明の点がある。

之等によつて大友十世親世公は、此の瑞光寺に因縁淺からざることを首肯することが出来る。前記の石碑が此の地にあることも無理からぬこと、せねばならぬ。

大寶山瑞光寺

が其後さう變遷したか、それには殆んど徴すべき記録を見出さない。

天正寇火之後久成空居、及蔣阜之再興、而令他徒弟交居、遂再成寺。(禪余集)

其後天正丙戌ノ亂堂宇槐墟ス。(雉城雜誌)

とあること、天正の戦の時矢張り此の寺も島津勢の爲めに破壊されたことはわかる。それから十數年を経過して府内の城主竹中重隆の時に至つて、萬壽寺の丹山師が萬壽寺再興の始めにあつて、草庵を此の瑞光寺址に營んで、瑞



光寺を再び稱へられたことが、一二の記録に散見せられる。その後府主竹中重興の時に丹山師の門弟で名高い功岳師が一時此寺に住して居られたことも「紀聞」等の記録に残つて居るが、其れから後に至つては「雜誌」に所謂「近古萬壽寺住僧退休ノ地タリ」で、久しく萬壽寺の廟寺として過ぎて来たものと思はれる。尙ほ史を考ふるに、これより先、慶長二年福原直高が大闇の命によりて、早川主馬首を替つて當府内城に封ぜられて来た時、新府主福原侯は府内の地を下して、當時の荷落を以て城地とし、荷揚城を築造する爲めに、大工事を起したが、此の時、侯は府内の士卒に命じて、瑞光寺境内の藪竹を伐つて、城地四隅の傍示を定められたといはれて居る。慶長二年は天正兵火の直後であり、瑞光寺には何等建物も無く、逸りには藪竹等も叢生してゐたものであらうと思はれる。今池畔を歩いて、

瑞光寺址の現在

を觀るに、五輪の塔のある小丘は周圍凡そ十間位、それも俗に云ふメゴ竹の叢生のために掩はれて、塔の邊りを廻るにも困難を感じる程である。藪竹を押し分けて丘上を探ると、嘗ては佛像でも安置されたかと思はれる型の石造の祠が二個ある。此の祠は昔「池中の

嶋島に辨天を祀る」といはれてゐる辨財天の祠であるか、それとも後世のものか、全然判明し難る。田圃の中を南に行くと、先達大湯線工事の爲めに今は廢地になつてゐる舊大湯線の線路上に出る。此處に上ると、直ぐ此の路の南側（新大湯線との間）に周圍十八間餘の小池がある。邊りの地勢を察するに南北の此の二つの池には然程の高低がない様にある。そして此等の池の近邊はいつも所謂深田で、土地極めて濕潤、二毛作は到底出来ない田地續きになつて居る。更に南方の田圃の境界を見るに、此處には古い崖の如きが連つて居り、それには篠竹の類が亂立して居る。筆者は一日、大分市役所に行つて、地圖を閲覽したが、此の邊り一帯が同地番になつて總面積が一段十歩程で現在萬壽寺の所有に屬して居ることを知つた。思ふに此の一段十歩餘の田地全体昔瑞光寺隆昌時代の所謂白蓮池で、此の廣い池が萬壽寺十景の一つに數へられた美しい遊覽の土地であつたのかも知れない。そして今親世公の碑のある丘は、今こそ田圃中に盛土した様な丘になつて居るが、所謂昔の「池中の嶋島」であつたものに相違なからう。「雉城雜誌」の瑞光寺の境内の項に「池中の嶋島に辨財天が祀られ

て居り、池には白蓮が美しく咲いて府中の遊覽地であつた。」旨を記して居るが、當時府内に於ける唯一の蓮花がこの一段余歩の池全面に楚々切つてゐたことを想像することが出来る。先般大分市西大分町磯崎三郎氏所藏の

瑞光寺蓮見詞

を同氏の好意によりて見ることに出来た。これは巾一尺長さ二尺四寸の唐紙で、紙質は相當に古く、点々紙魚のために痛められて居る箇所もあり、又前後は斷ち切られた様になつて居る。所有者磯崎氏は「前の方は汚れてゐたので切つてのけた。」といはれて居るが高山市長は「前の方には繪があつたらしい。」とも話されて居る。

瑞光寺蓮見詞

教外別傳の三日月は不立文字の蓮花筆を照し迷故三界の道俗も悟故十方の街に涼むこし水無月のはしめつかた新豊山瑞光寺の蓮の花さかり見頃やはあらめきて友人あまた伴ひ道すがら涼み行けるこて稻荷の森の木陰に休らひて

涼しさや蟬も啼やむ椋椋

農夫か葉を見て

田の草や笠かたふけて二三人

追れてものかぬ鳥や瓜島

井手筋や流れもあへず瓜の皮

瑞光精舎の蓮見まこみに涼しき花の薫り佛界もおもひや

られて

日盛は寺の外なり蓮盛

うるはしき卷葉や是も蓮の花

天神の御社に詣

花も實も跡の茂りや神の梅

此池の白蓮も盛なり

葉かくれや駕かもしらず蓮盛

まつ白し蓮より出て露の玉

龍王の小社もあり

嚙龍の都の蓮も今時分

御本尊を拜して

御佛の足ぬかつくも花見かな

迎の事に今日は四方山の青嵐にもふかれ川つらの涼しき

流れをも見ましみて龍が鼻にいたりいつものたのしむ煙竹



の煙は薫れも夕風はいまた薫る頃

青龍の鼻息もなし夕涼

一よたち田にもかけたし龍か鼻

山々川つらの風光暫く夏をわする

夏川の是やおもひ出歩行渡

流れノ、涼しや岸のわたり舟

山々やまたふくみ聲青風

今はこて又御寺に詣蓮の苔二つ三つたうへて御佛の家土  
産になむ手毎にもちてかへり侍りぬ

菩薩達の眞似して蓮の苔哉

睦友軒 松風 艸

豊後の地には由來連俳人が多い。文學史上に名高い西山宗因の如きも、嘗ては當府内圓壽寺住僧寛佐法印に教を請うたこゝが「豊鏡吾鳴録」にもある程、引繼いて近世の俳壇には當地のものが頭を傾けてゐたこゝは種々の俳書にも見えるこゝろである。さて此の「蓮見詞」を記した松風は何處の者で、何れの年代に屬するか、いふこゝろは判明しないのであるが、要するに此の「蓮見詞」によつて、過去の瑞光寺池の蓮の美しく、地方有数の遊覽地であつたこゝろは

肯つかれる。

瑞光寺遺物

ミしては、今、市内萬壽寺境内の東南隅庭中に、高さ一尺六寸五分、周り五尺五寸の石に佛像の高さ一尺一寸餘のものを四面に刻してあるものが一個、九寸立方餘の石に、これも四面を刻してあるものが一個、そのの臺石らしい、や、大きい石二個、總て、四個のものを、積み重ねて保存されて居るが、當寺大僧老師の談によるに、先般の大湯線路變更の爲め、瑞光寺池の南方を開鑿中、工夫の手によつて地中から此等のものを掘り出し、其後當寺で保管するこゝろになつて居るこゝろ。此新線路の邊りは舊同連池の南に當るこゝろで、此の邊から西南部、今民家の數軒建つてゐる附近、元町に通ずる道路のあたりが、古の瑞光寺境内であつたものと思はれるが、今は査ミして何等其礎石らしいものも案むるこゝろが出来ない。只だ現大湯線路の下方に、形ばかりの小池が過去の名残を留め寂しく立つてゐる老松が無心の風に吹曝されてゐるばかりである。

千貫井戸

上野の戸次街道が中學校道ミ丁字形に交つてゐるこゝろを、更に圓壽寺の方へ行くこゝろ一町餘り、左の方に巾三尺許りの路地があるのを入つて、七、八間も行くこゝろ小野龜格氏宅(大字上野一七三番地)の前に行く。するに同氏宅の東南方、小徑の左側に沿つて、櫻、椿、ウシノミ、樟等が一團ミなつて生繁つた叢林があつて

小なる祠

が此等の藪の中から頭を少し現してゐる其の北側に古井戸のあるのを見る。これが所謂千貫井戸で數百年前大友公が此の上野ヶ丘に屋形を構へて、威を鎮西に振ひ、遠くは海外にまでも好を通じて、我國文化の魁をしてゐた際、御用水ミして日夕使用せられてゐた井戸ミ稱せられてゐるのである。附近の者は此れに對して一種の神秘ミ敬虔の念ミを抱いて、此れが破壊を恐れて今日迄大切に保管して居るのである。曰く「此の井戸の周りにある樹を過にも切る様なこゝろがあるミ早速腹が痛くなる。」こゝ。かういふ戒めもなければ、疾うに此の井戸は壊されて、今の人には其存在も忘れられて仕舞つて居る筈なのである。

或古老はまた曰く、「大友公時代の

お姫様のお化粧水

ミして、お屋敷からこゝまで汲みに來られたものである。」こゝ。大友公時代の御用水ミしてはまだしも、美しいお姫様のお化粧水ミ聞かされては此の井戸も亦一層の色彩を放たざるを得ない。「以前には小さな花束を此の井戸に挿げてあつたこゝろもある。」それにしては千貫井戸といふ名は不可解なものであらねばならぬ。曰く「此の上野ヶ丘は由來土地が高燥のために井戸を掘るには一通りの骨折でない。大友公は屋形の東南に當つた此の土地を最も適當なこゝろと思はれて、其入費を厭はず遂に千貫の巨金を投じて、此れを竣成されたのである。それから此の名が起つたものである。」こゝ。又曰く「お姫様がお化粧する爲には、美しい水が必要である。水を美しくするには井戸に金を投げ入れておけばよい。お屋敷では水の美しさを戀する爲に遂に千貫の大金を惜しげもなく此の井戸に投げ入れた。それから此れを千貫井戸といふ様になつた。」こゝ。井戸に金を投ずるこゝろいふ話は他所でも嘗つて聞いたこゝろのある話であるが、此の上野ヶ丘の一隅の古井に、かゝる美しい言ひ傳へが今猶ほ保存されて居るこゝ



ふこまは、何と嬉しいこまではないか。  
祠は水神様を御祀りしてあるのだといふが、その祠に隣して、此の珍しい傳説を持つ古井戸が千古の神祕を籠めて今靜かにかくれて居る。叢から覗くこまそれは一邊が凡そ二尺五寸程からなる

**六角形の切石** に疊まれたこます暗い深さも判らぬものが靜かに眠つて居るのである。試みに小石を取つて投ずるこま、遙に深いこまで優しい水音がする。急に波紋を描いた底の水は、又再び常暗、常靜の以前にかへつたのであらう。聞きして聲がない、恐ろしい罪を犯した心地に襲はれながら歸る時、此の古井戸が幾久しく安全に保たれるこまを斬るのであつた。

### 百合若大臣塚

百合若大臣の傳説は全國的な英雄傳説——巨人傳説的色彩を有する——であるが故に、その遺蹟を稱するものも全國にはその数が少くはない。一例を擧げるこま、上州妙義山には百合若の射抜いたこま洞窟があり、又妙義神社には

百合若所用を稱する長さ五尺、厚さ七八分位の鐵弓こま、それに相當する鐵箭こまがあるといふ。吾が豊後にも大分元町の百合若大臣塚を中心として、その遺蹟を傳へるものが散在して居る。此では先づ大臣塚の調査報告を主として、百合若傳説の研究に及ばうといふのである。

**位置・現状** 百合若大臣塚は大分市大字大分字元町にあつて、現在の大分高商寄宿舎の東側柵外にある小丘がそれである。地積臺帳には、萬壽寺所有地として、山林二段七畝二十歩を記されてある、その大部分である。實地に就いて見るに、大體圓形をなした丘で、周圍歩測的五十間位、高さ約六間位と思はれる。それに松その他の常綠樹、篠竹等が叢生して居る。一見稍完全なる圓形古墳を考へられるが、更によく調べるこま、この圓形小丘より東北に、低い丘陵が延びて竹木が叢生して居る。これは原形を著しく損して居るので、よくは判らないが、前方後圓墳の前方に當る所の様にも想像される。若し然らざれば、この塚は柄鏡塚であるが、丘陵が形を損して居るので確定しがたい。さて前記の圓塚へは一の小徑が通じて居る。頂上は稍平調で、中央に一大石碑が建つて居る。高さ六尺、幅三尺四

寸、厚さ七寸の花崗岩の偉大なる扁平蓮瓣形のもので、その周圍には小なる自然石を並べて、一墓域を形成し、石の線香立、奉納の小鳥居等が置いてある。石碑は寛永年間の發掘の際建立したもので、表面中央に大きく梵字（キリク）を刻し、その下一面に碑銘、裏面には此の碑建立の由來が記されてある。

**碑文** この石碑は何分にも三百年の風雨に晒されて居るために、兩面とも刻字著しく磨滅し、殊に表面の銘文は小字迎全く讀み難い。碑文は「豊國史談」第二號（佐藤藏太郎氏編）を始めとして、「豊後史蹟考」「豊國小志」「大分市史」等に掲載して居るが、すべて皆誤つて居る。筆者は幸にして「禪餘集」（寫本）に表面の銘文の記載があつたので、これを基礎として實地に就き仔細に點檢し漸く判讀するを得た。表面銘文は梵字の下一面に十六行に刻されてある。文字の排列等左の如くである。

豊之後爲隆國府之傍此丸山自往古國人  
傳説百合若大臣塚矣維時寬永乙亥  
夷則念五日大風頻至塚上之松忽折  
矣越丙子小春初二日豊州府主

日根野織部正藤原吉明公命木口成直小倉員定兩臣令栽培三本之勁松時得一之石棺敬發之則靈骨及大刀甲冑亦現在矣恭惟大臣終焉之地既是實證也大守感慨之餘立碑於塚上使小比丘作之銘祀焉厥辭曰

靈骨昭々 既是現前 功治四海 名譽九天  
蒙古不來 皇風永屆 將軍塞外 世盛國全  
神在不昧 透徹漢家 虔備珍羞 眞靈享旃  
積善餘慶 糞子孫賢 至祝至禱 銘刻石堅  
鶴齡千秋 松壽万年

寬永十三 (以下不明)  
蔣山萬壽寺 (以下不明)

尙終の二行は「禪餘集」には、年號はなく「蔣山主翁丹山宗昆謹記」とあるが、碑文を熟視するに、「寬永十三」云々三年號があり、次に「蔣山萬壽寺」云々が見える。最後の一行は、或は「蔣山萬壽寺主翁丹山宗昆謹記」とあるのかこも想はれる。

裏面の文字は、表面に比すれば割合に磨滅少く、大體判讀することが出来る。全部八行。



如碑之銘文此山國（石門）人□□  
 仰り若大臣殿つか寛永十二年七月  
 廿五日依大風塚松吹折右枝以松三本  
 時骸骨太刀甲如現在爲歴然  
 如舊藏爲末世銘刻碑石者也  
 寛永丙子十二月吉日

大將軍源家光公之御世

日根野織部正藤朝臣吉明謹立

序でながら、如上の碑文は前記「豊後史蹟考」以下の各書にもすべて「雉城雜誌」の文を襲用して、表面裏面とも磨滅して讀むべからずとして、「雉城雜誌」に所謂「或家に藏する記録」を稱するものに依つて記して居るが、表面の文は僅かに偏の部分のみ、裏の文は錯誤甚しき文を掲げてゐる。表面はいざ知らず、裏面の文は決して讀むべからざる程度ではない。此に於いて吾人は文獻よりも先づ實地調査の最も緊要なることを痛感するのである。

大臣塚の發掘

上掲の碑文に依つて窺はれる様に、此の塚は古から土人に依つて百合若大臣殿の塚と稱せられて居たが、寛永十二年七月二十五日の大風に塚上の松が折

れたので、その年の十月二日に當時の府内城主日根野吉明の命に依り、家臣木口・小倉の二名が、折れた松の植繼として、三本の松樹を植ゑた時、計らずも石棺を發掘したのであつた。尙この當時のことに就いては、天野信景の隨筆「鹽尻」にも記載がある。即ち、

世にいふ百合若或は大臣豊後國船居に傳ふる故事也、  
 百合若塚は船居の舊山萬壽興禪寺にあり、二十餘年前揚  
 宗和尚の時其塚を發く、石棺の内立る白骨一具あり、亦  
 古刀一柄朽のこりし、額王も見られし、命じて元のこま  
 く埋みて祀られしと云ふ。（鹽尻、卷四十一）

これにいふ「舊山萬壽興禪寺」は「蔭山萬壽興聖禪寺」の誤、又揚宗和尚の代といふのも、丹山和尚の誤であらう。思ふに揚宗和尚は萬壽寺中興後五世歴代、寶永元年寂で、元祿頃の人であつて、寛永頃とは年代が隔つて居る。寛永頃の住持は中興丹山和尚で、碑銘もこの人の作とすべきである。又この塚を萬壽寺内に在りとするのは妥當で、萬壽寺が現在の地（大分市東新町）に遷つたのは、寛永八年でそれ以前は元町附近にあつて、寺域廣大で、すぐこの塚の下にあつた瑞光寺もその末院であつた。この塚も當時の寺

域内にあつたと思はれる。尙この發掘の記事は萬壽寺の記録中にもある。

寛水十三丙子十月二日御墓所ノ松吹タホシ、御尊カイノ石ヒツ出ル、朱ツメノ中ヨリ御刀御弓ハクロカネ、由原山ニ御寶納被遊候。

日根野織部守様御代直ニ檢使ニ御越、御改之上ハカ所ニ石トウ御立、八百二十六年メニ御尊カイ相知レ、其時ヨリ十月二日萬壽寺ヨリ御供養ノヒヤウ祭り被成候夫迄ハ相知不申。（萬壽寺世代日記）

この記録は明和六年の筆録である。由原山（梓原八幡宮）に奉納したといふ遺物は、現在如何になつてゐるか、確かめる機會がなかつた。更に「雉城雜誌」の記事に至つては稍傳說的潤色を加へてゐる。

時ニ日根野氏其遺事ヲ聞、同（寛永）十三年九月下旬令ヲ下シ、去年七月大臣塚ノ松疾風ノ爲ニ倒ル、里民ノ口實又信スヘシ、其塚再補セサレバ後世必ス之ヲ崩サン因テ家臣木口與左衛門小倉九郎衛門ヲシテ舊ノ如ク三本松ヲ培ハシムルニ至テ、双鷹來テ林中ニ悲鳴シ、之ヲ追ヘトモ去ラス、貝石棺ヲ護スルニ似タリ、而シテ三本松

ヲ培フテ後其所在ヲ知ラス、一奇事トス、且一石棺顯ハル、邑民ノ役丁ニ當ルモノ其蓋ヲ開クニ及テ、忽チ眩メキ絶入ス、時ニ十月二日也、再ヒ吉明此ニ來臨シテ萬壽寺ノ侶丹山ト共ニ是ヲ見ルニ、靈骨東首シテ活ルカ如ク佩刀甲冑其餘之弄器尙存在ス、須臾ニシテ壞滅スト。

（雉城雜誌、卷七）

此の植繼の三本松も現在既にない。傳へる所に依るに、現在の萬壽寺立關の梁は、此の樹を以つて造られたといふ。さて此の塚が古墳であることに疑はないが、果して何人の塚であるか——といふ問題は、自然百合若傳説の主人公なる百合若大臣の身許調べになる譯で、先づ便宜上、この地方に語り傳へられた百合若傳説、及び文學的作品に表はれたそれに就いて一言しよう。

百合若傳説とその文藝的作品

豊後方面に傳へられる百合若傳説は文學的作品——殊に舞の本の「百合若大臣」の物語の内容と大差はない。恐らく同一系統の物語と思はれる。此の傳説は「豊府紀聞」や「雉城雜誌」等にも記載されてあるが、便宜上本會同人編の「豊後傳説集」中より引用すれば——



豊後守に百合若さいふ人があつた。この人の父は左大臣公光さいふ人であつたが、百合若は非常な強力で、常に鐵弓鐵箭を用ひてゐた。此の人は時の帝の勅命に依り、當時來寇せる蒙古を征伐せんために筑紫に下り、豊後の國守になられた。そして對馬の沖で敵艦を戦ひ、神の加護に依つて大捷を得たので、本土に歸らうと思つて、軍船を引連れて玄界島に寄られたが、百合若は此の小島に上陸して、生來の病癖なる居眠りを始めた。百合若の家臣に別府太郎、同次郎さいふ兄弟が居たが、兄は弟を誘つて、密かに百合若を捨て置いて、軍船を率ゐて豊後に歸り、御臺所には大臣戦死を披露し、且つ朝廷へもその旨を奏上し、己は遂に豊後一圓を領して榮華に耽つた。そして太郎は遂には御臺所に道ならぬ思を寄せて色々苦しめ申した。御臺所は困却の餘、若しや背の君の未だ永らへ給ふこともやま、萬一の頓をかけ、百合若の愛鷹なる翠丸の脚に通の玉章を結びつけ、心あらば君の許へさ云ひ聞かせて放ちやつた。鷹はやがて雲間に飛去つたかくする内に、別府の御臺所に對する責苦は更に加つたが、御臺所が何としても別府の心に従はないので、遂に

憎きは百倍し、簀卷きにして近くの池中に沈めようとした。處がそれを察んだ門番の翁は、密に己の娘萬壽姫を以て御臺所の身代りとし、蔭の生茂つた池中に入水せしめた。一方百合若は唯一人島に取残されて、居眠りは覺めたが、歸る術もなく、その儘島に留まつた。處が或日一羽の鷹が舞下りたのでよく見るに、それは己の愛鷹した翠丸であつた。その脚に結び付けられた御臺所よりの玉章を見て、別府の逆心を知り、その不忠不義を憎み憤り、指を噛み切つて返事を認め、鷹につけて本土に還らしめた。鷹は天空を驅つて御臺所の隠れ家に歸つたが、御臺所は血書の手紙を見て、且つ喜び且つ悲み、一個の視筆墨を再び鷹につけて送つた。然るに鷹は視の重さに弱り果て、漸くにして玄界島迄には達したが、遂に海に墮ちて死んだ。その後百合若は漁船に救はれて本土に歸り、姿をやつして別府の邸に到り、下僕として住み込み、名を若丸と稱した。或年正月、別府兄弟が弓始めの式を擧げた時、若丸は矢取りとして出でたが、別府の弓術を見て、大いに嘲笑つた。別府これを見て大いに怒り、若丸を召して、曾つて百若の用ひた鐵の弓矢を持ち

出て射させた。若丸は承知して弓矢を受けて立上り、別府に向つて、その不忠不義を責め、「吾こそは汝の爲に苦しめられた百合若である。」と名乗つて、唯一矢に射殺した。かくして百合若は朝廷に奏し再び豊後守となり御臺所の代りに入水した萬壽姫の苦節を愍み、入水の池の畔に一字を建立して寺領をよせた。そして池に姫に因んで、蔭山萬壽寺と號した。又愛鷹翠丸の骸を厚く葬つて御鷹の宮なる祠を建て、祀り、又その菩提を弔ふ爲に、鷹雄山神宮寺を建立した。後百合若はこの地に死したが、その遺骸を葬つたのが、現在の百合若大臣塚であるといふ。(豊後傳説集)

これが現在豊後方面に傳へられる傳説の大體であるが、この傳記は早くから中央の文壇に紹介され、幸若の舞の詞、即ち舞の本の中でも、古いもの、一とされてゐる「百合若大臣」の作がある。この作は大體前記の傳説と同様であるが、門脇の翁の娘の沈んだ池はまんわうの池と傳へて居る。

更に此の傳説が英雄傳説として痛快な又悲壯な物語である所から、徳川時代には盛んに文藝作品の中に取入れられ

淨瑠璃に小説に、幾多の百合若物が出版された。主なものを擧げると、

一、淨瑠璃

- 百合若 井上播磨正本
- 百合若高麗攻 岡本文彌 正本
- 百合若大臣野守鏡 近松門左衛門作 寶永七年
- 百合若高麗軍記 爲永太郎兵衛作 寛保二年

始めの二者は古淨瑠璃であるが、近松作のものは寶永七年五月に、竹本座で、操にかけて上場して喝采を博した。この作は大略は舞の本の傳説に基づき、それに此の作者一流の人情味を加味して、興味津津たるものとした。殊に近松は主人公を豊後の旗頭太宰和丸とし、平城天皇の勅命で、百合若大臣の稱號を賜はり、蒙古追討に向ふこととし、或はその家臣に府内太夫秀主父子、別府卿武者雲足兄弟の忠奸を對立させ、或は和丸の許嫁立花姫の精靈と化して玄界島に飛び、和丸と契つて一子還城丸を擧げる等、波瀾多き複雑さを見せて居る。爲永作はこれを模倣したのである。



二、演 劇

前記の淨瑠璃は多く操芝居にかけられたものであるが、別に近松の作以前左の如き藝題の演劇があつた。

今用百合若 大阪竹島座 元祿十三年  
百合若唐船 京都龜屋座 同

三、小 説

舞の本や近松作淨瑠璃等に依つて世上に宣傳されたこの傳説が、當時の大衆的小説の好材料となつたことは當然のことであらう。

百合種 錦島	五冊	八文字 其笑作	寶曆二年
百合種 高麗軍記	三冊	同 瑞笑作	明和元年
百合若 大臣島眠	二冊	南和笑 桂蘭人作	寛政十年
百合若 野居鷹	五冊	歌川 豊國畫	文化五年
百合若 丸弓勢名譽	三冊	萬亭 史馬畫	同十一年
錦島 替釣舟	六冊	線 亭可山作	同十一年
百合若 軍法鏡櫻	三冊	歌川 美丸畫	文政元年
		志満 山人作	同二年
		歌川 國信畫	

右の内、最初の作は八文字屋の浮世草子、第二のは黒本、

曰大臣塚、以爲百合種大臣之家妄矣、丹山亦取俗説作文可謂謬也、正是大分君種臣之墓、説具于下。(豊後國誌 卷四、墳墓)

大分君種臣 日本紀大武紀曰、元年秋七月……世俗相傳云、百合種大臣者、豊後國君、其人傀儡有武力、善演強弓、嵯峨朝有蒙古之警、討之有功、其妄誕、事實年曆皆失、恐是悞稱種臣之事諸歟。(同卷四、人物)

この説は書紀大武紀に見える人物を以つて推定したのであるから、現在でも信ずる人が相當に多いが、「豊後史蹟考」の著者等はこの説を駁して居る。

(ロ)藤原字合ミする説 「雉城雜誌」に「百合若記」ミ稱する書を引用して、百合若は野木合大臣なる號を賜つた人ミあるのから想像して、九州に下れることのある藤原字合に擬して居る。又この説は可成廣く傳へられたミ見え「鹽尻」にも「百合若は淡海公の三男參議字合、一には馬養ミ稱せし此人なりミ、されども據ある古書に見はへらず」ミある。「雉城雜誌」には大臣塚を此の人の墓ミするのに對しては、大化の墓制を引いて駁して居る。

(ハ)安倍宗任ミする説 安倍宗任が源氏に降伏後豊後に

第三は黄表紙、第四は讀本、終の三種は合巻物である。すべて同一材料を取扱つたものであるが、唯讀本の「百合若野居鷹」だけは稍異つて、場面を九州方面に取らず、専ら上州妙義山近傍の遺跡に附會し、鎌倉時代羽州の領主由利種一家のお家騒動のこゝミして脚色して居る。

百合若及び大臣塚に關する諸説 さて叙上の如く百合若傳説は殆んミ全國的に漫延して居るのであるが、その主人公百合若合なる人物は果して如何なる者であらうか——といふことは、古來種々憶測されて居る。今これに關する諸説を考へるのに、大體歴史上の人物に求めようとする一説、即ち謂ふべくんば歴史的解釋ミ、傳説學的に見て解釋を下さんミする二種に大別される様である。而して概ね前者は古人に多く、後者は現代の學者に多い。

一、歴史的解釋

(イ)大分君種臣ミする説 これは豊後岡藩の儒臣にして「豊後國誌」の編者なる唐橋世齋の説く所で、「豊後國誌」に掲げて居る。  
大人塚 在笠和郷六坊村松林中……俗呼其地曰三株松、又

來たといふ俗傳を根據ミし、大臣塚より巨大なる枯骨が出たといふのを證據ミして、山田字吉なる人が「安倍宗任ミ緒方惟榮」ミいふ書に説いて居る。

二、傳説學的解釋

かゝる種類の傳説の主人公を歴史的人物に結びつけようミするのは、元來無理な話である。これを一つの土俗の間に生ひ出でた物語ミ見て、そこに何等かの暗示を得ようとするのがこの説で、多く現在の傳説學者の間に行はれる考である。

(イ)九州在任の公卿達に依つて作爲されたミする説 これは既に「雉城雜誌」の編者の記した處で、一種の卓見である。  
予文政天保ノ際、京攝東武ノ際ニ官遊之時、國學者流ノ人ニ對シテ屢此ノ話ニ及フト雖、慥ニ何ナル人ト云コトヲ詳ニセス、此大臣ノ名世上ノ人々ニフカク輪矣スレトモ唯稗史小説ノ俗話ニシテ、所謂關東ニ太田法師坂田之公平杯ノ怪力ヲ稱スル如ク、村廻ノ絮談也トス、爰ヲ以テ元正聖武兩朝代之事、萬葉集中ニ作ル歌モテ察スルニ



太宰之帥及ヒ吾此城ニ下向スル國守達ノ公卿ハ其地未タ  
王化普カラスシテ、時トシテハ異賊ノ侵シ來レルコト共  
アリ、當代遠島ナトノ罪ニ處セラルルカノ如クニソ思ハ  
レケン、且其前後太宰ノ帥タル大伴旅人同家持卿及ヒ此  
卿（藤原字合）ノ如キハ當時ノ歌仙達ニシテ、公務ノ暇  
羈旅ノ辛苦ヲ遣ラン料ニ、風流ノ興ニ託シテ、アラヌ怪  
譚共作爲アリシコト、此集中ニ數々見エタレバ、其頃異  
賊ノ警アリシ前件ノ浮説ナト作り出シ玉ヒケルニヤアラ  
ン。（雄城雜誌、卷七）

（ロ）巨人傳説の一種とする説 藤澤衛彦氏の説で、巨  
人傳説のだから、ぼつちのこゝで、大臣は大人の轉じた語  
で、勿論歴史上の人物でないとする。

（ハ）希臘神話の輸入で、百合若即ちユリシスとする説

これは夙に坪内逍遙博士の唱へられた説で、比較神話學的  
立場に立つ卓論である。博士は既に明治三十九年一月號の  
「早稲田文學」誌上を始めて、「中央史壇」大正十一年  
七月號（希臘人物變）等に於いて發表された。それに依る  
ミ、ホーマーの「オディッシー」ミ百合若傳説ミを對照し  
て、兩者間に著しく相似點のある箇條——（一）百合若が

鬼面人身の蒙古軍ミ戦ひ、敵が妖術で惱ますのを鐵弓を射  
たて、大勝する條ミ、「オディッシー」の主人公ユリシス  
がトロイより凱旋の途妖怪に惱まされる條、（二）御臺所  
ビが王の不在中、イサカ國內の豪族に婚姻を申込まれる條  
（三）翠丸が百合若ミ御臺所の間を連絡する條ミ、ユリシ  
スの守護神ミナーヅがユリシスミその子を守護し、足に翼  
のあるヘルミスがその間を飛翔して通信する條、（四）百  
合若が姿を紛して若丸ミなつて、本國別府の邸に寄寓する  
條ミ、ユリシスがミナーヅ神の通力に依つて白髪のお翁ミ  
化し、乞食姿になつて舊老臣の館に身を寄せる條、（五）  
百合若が鐵弓を持ち、本名を名乗つて別府兄弟を誅する條  
ミ、ユリシスが青銅の弓を以つて敵を滅す條、——等のあ  
るのを擧げて、ユリシスの物語が自然葡萄牙人等の口を經  
て、我國に齎されたものであらうミ推論された。元來、説  
話傳説等には洋の東西に非常によく似通つた點がよくある  
もので、それを以て直ちに兩者の説話に連絡がある様に考  
へるこゝには左想し難いが、この傳説位の著しい類似點や  
且つ傳説發生の時代（始めて文學的作品に表はれたのは、室町

末江戸初期らしい）場所（葡萄牙との交易が盛んであつた豊後）  
等から見て、首肯せしむべき點が多い。

（ニ）室町時代に自然に發生したとする説 これは前記の  
坪内博士の説に對する反駁で、「文學に現れたる我が國民  
思想の研究、武士文學時代」に於いて、津田左右吉氏の述  
べられた所である。これはこの傳説を以つて直ちに希臘神  
話の輸入ミすべきでなく、蒙古征伐のこゝも、倭寇の行は  
れた時代ミして自然に生じた著想であり、別府兄弟の反逆  
も下對上の時代思想を反映したもので、自然ミ時代に芽生  
えた説話であるといふのである。

大體以上の如く、この傳説に就いて、又主人公百合若に  
就いて諸説があるが、轉じて大分に存在する大臣塚に就い  
ては如何いふに、これは歴史的解释を取る人達に依つて  
或は大分君稚臣の墓ミも、安倍宗任の墓ミも稱せられるこ  
ミ、前述の通であるが、佐藤藏太郎氏は稍異つた見解を述  
べられた。

予此塚の構造及び地勢より察するに、未だ何人の墓たる  
事は詳かならざるも、蓋し天平以降、元慶仁和の交に至

るまで、國司國主ミして、當國に赴任せられたる人の墳  
墓たるを疑はざるなり、……………又大臣塚といふも、  
元巨大の枯骨出でしより大人塚ミ言ひしを、大臣ミ轉化  
したるにて大臣塚にはあらず、是れ全く國司たる人の墳  
墓たるに他ならざるべきなり。（豊後史蹟考）

地勢等より見て稍面白き見解であるが、天平以後の國司云  
々は果して如何か。副葬品等の調査に依らなければ、輕々  
に時代を定めるこゝは出来なからう。又大人塚を大臣塚ミ  
轉化したミの説は、枯骨出でた直後に建てた前掲碑銘に、  
既に往古より百合若大臣塚ミ稱したミあるのに矛盾する。  
但し大臣が大人の轉化であるミの説は、前記藤澤氏の説の  
如く、首肯されぬこゝもない。要するに、此の塚の果して  
如何なる時代、如何なる地位の人物の塚であるかを定め  
るためには、實に文獻上の穿鑿のみでなく、周到なる考古  
學的調査研究を経ずしては速断すべき性質のものではな  
い。此には唯從來の諸説を紹介したに過ぎない。

**大臣塚の信仰** 大臣の所在地なる元町部落近傍の  
人々の間には、「百合若大臣さま」ミ稱して相當參詣者が  
多い。これに對して萬壽寺側に於いては、明治三十九年頃



拜殿新築の計畫もあつた。見えて「大臣塚拜殿新築設計書」が残されてある。現在塚の前には奉納の小鳥居が白木綿の轆等が置かれてある。筆者は恰かも参詣に来た二人の老嫗に、この塚に對する信仰談を聞くことが出来た。

この神様はおこりによく利かれる。家にこの病人がある時には、この塚に参詣して、碑の下を二握り持歸り病人に知られぬ様に、白紙に包んで、病床の下に入れて置く。その夜から懐ひ止む。但し病人に知れると利目が無い、治癒すれば、その土は再びもこの處に還すのである。そしてそのお禮として、鳥居や轆などを奉納するのである。

蓋しこの信仰は、鐵弓を用ひた。傳へる位の英傑なる百合若の力に依つて、病魔の退散を祈る。いふ思想から發した信仰であらうと思はれる。

其他の百合若關係遺蹟

大臣塚に關する調査報告

は敍上で終るが、尙この傳説に附會せる一二の遺蹟に就いて述べる必要がある。現在大分市附近に散在する此の種の遺蹟としては、蔭が池址・くりくり山・二つ塚及び萬壽寺・神宮寺・御鷹宮等である。この内蔭が池址は瑞光寺址の章

あるかも知れぬ。

この話にいふくりくり山の碑は、實戒寺入口即ち金堂の前の向つて左側に、西面して建てられてある。總は高さ二尺九寸五分、幅一尺、厚さ七寸、臺石は前幅二尺三寸、横幅二尺、高さ七寸の小石塔で、享保十二年に建立したものの、正面上部に梵字二十五字（最上部に阿字）を刻し、その下一面に銘文がある。

（正面） ○の位置はすべて梵字

○ ○ ○ ○ ○ 享保十二年丁未天願主河野清左衛門

○ ○ ○ ○ ○ 三月初六日

○ ○ ○ ○ ○ 傳聞此所者別府兄弟墓所也

○ ○ ○ ○ ○ 依之造立石塔一基祈幽魂苦

○ ○ ○ ○ ○ 提者也然者信心施主家門

○ ○ ○ ○ ○ 繁榮心中請願成就圓滿

○ ○ ○ ○ ○ 繁榮心中請願成就圓滿

（右側）乃至法界（左側）平等利益  
この丘に就いては、「大分市史」は恐らくは「雉城雜誌」に依つた見えて、古墳説、馬墳説、馬術訓練の丘等の説を擧げて居る。「雉城雜誌」を引用する。

此墳恐ラクハ非也、只一堆ノ小山ニシテ叢竹繁茂シ、村民ハタリ山ト呼リ、或ハ上代貴戚ノ墓處ナルヘキ歟

で前述したし、萬壽寺・神宮寺・御鷹宮等は別に一章を設けて叙述すべきである。考へるから、此ではすべて省略して置かう。

一、くりくり山

も大分中學校校庭の東北隅にあつた小丘であつたが、同中學校長官舎の敷地となり、丘を崩して、その上に官舎を建てたので、今その名残も留めない。「大分市史」所載の寫真を見るに、鬱蒼と茂つた小丘であつたらしいが、俗吏の手に依つて、此の豊かな傳説的色彩を有つ小丘が、残る所なく崩れ去られたのは、まことに惜しむべきことである。この丘の現形に就いて附近の實戒寺の現住宗尊空師の談を聞いた。

くりくり山は高さ五間位で、總面積は二畝以上もあつたらう。假頭形に中央が膨れ上つて居て、樟や樺等の樹木が繁つて居た。子供達は此の丘の頂に上つて遊んで居た。頂上には石塔が一基西向に建つて居たが、丘を崩す時持歸つて、今當寺の金堂前に置いてある。今中學校長官舎の東側に樟の小さいのがあるが、或は元の樟の葉で

按ニ此山ノ南ニ馬墳ト云田圃ノ名アリテ、松坂八幡宮流鏑馬ノ地ナリト云傳ヘタレトモ、此地大友氏西山ノ城ヨリ纒三四丁カ程ナレハ、大友氏ノ馬場ニテ、件ノ山ハ阿南ノ庄上市村ニアル處ノ茶臼山ノ如ク、馬術訓練ノ爲ニ築キタルモノナルヘシ、村民ノタリト呼フ名モ當ルニニタリ、尙可尋。（雉城雜誌、卷七）

現物の既に失はれた現在に於いては、この丘が果して何であつたかを推定する由もないが、崩れ去る時には、内部からは何物も出なかつたさうだ。

終りに、この丘に關する傳説を紹介する。この丘は別府の墳に傳へる他に、百合若の愛馬を繋いだ所で、この馬は百合若が零落れて立界島から歸つた時も、よく主人を見て居て、涙を流して喜び嘶いたとも傳へる。「雉城雜誌」の所謂馬術訓練云々ニ關係のありさうな口碑である。尙この附近の童謡に次の如きものがある。何等かの暗示があるかも知れぬ。

太郎坊次郎坊、馬きこに繋いだ  
くりくり山に繋いだ  
何もつて繋いだ



去年の栗殻、今年の稗殻  
くりくり混ざって見たら、栗一つ捨つた  
摘み割るも惜しき、嘴み割るも惜しき  
摘み割り嘴み割りして見たら  
稚兒の様な子供が出たよ。(豊後傳説集)

二、二の塚

速見郡朝日村なる實相寺山の東、所謂石垣原の地にある  
これ亦傳説には別府太郎・同次郎の墓と稱する。「豊後  
志」(寫本)はに面白い傳説を記載して居る。

百合若丸ニ別府太郎次郎トテ家臣アリケルニ、玄海嶋ニ  
捨カヘリシヲ惡ミテ、大臣歸國シテ手ツカラ太郎ヲ殺シ  
テケリ、其間ニ次郎ハ馬ニ鞭テ太神郷ヲ過テ國前郡ニ逃  
ントス、大臣モ又騎馬シテ追フナリ、然ルニ日出莊井出  
村トイヘル所ニテ、向フノ方ヨリ法師一人來ル、大臣言  
ヲカケテ、法師馬ヲ止メヨトイヒケレハ、彼ノ法師傘ヲ  
開キテ遮ケレハ、馬驚キテ不進、大臣次郎ヲ捉テ、胸マ  
テ土ニ埋メ、竹ノ錐ヲ添置キ、往來ノ人ニ一錐ヲ引カシ  
ム、歴々日終フ、其所ノ小森ノ中ニ小社アリ、次郎ノ靈

ナリト云、于今法師ハ森中ニ入ラス、モシ入トキハ大蜂  
出テ群刺ストイヘリ。(豊後志)  
太郎次郎伏誅の傳説は相當廣く行はれ、各地にその遺蹟を  
稱するものがあるらしい。  
さて二つ塚に就いては「雉城雜誌」は太郎塚の項に、後  
藤頼田の説を紹介して、鼠の窟の土蜘蛛兄弟の墳として居  
る。

吾友後藤眞守云、此塚及速見郡ニアル處次郎塚、別府兄  
弟ノ墳ト云傳ヘタレドモ、國史百合若ノ所見ナケレハ恐  
ラクハ非也、日本紀景行紀十二年……茲山有大石窟、曰  
鼠石窟、有二土蜘蛛、住其石窟、一曰青、一曰白云々、  
天皇此ニ蜘蛛ヲ誅シテ埋タル址ナルヘシ、青讀テアホトス  
太郎讀テタロトス、白讀テシロトス、次郎讀テシロトス  
五音相通スレハ也。(雉城雜誌、卷五)  
一寸面白い説であるが、「豊後史蹟考」はこの説は根據な  
しとして、皆上代の古蹟であらうと記して居る。

百合若傳説は巨人傳説の色彩を有して居るので、この地  
方にもさうした遺蹟があり、瀬尾村北下郡や市内上野にも  
巨人の足跡といふのがあつたといふ。

同人より

▽前冊が内容上稍乾燥に流れたのに對して、  
本冊はぐつと趣を變へて、主として傳説的遺  
蹟を網羅したので、傳説研究熱なるかの如き  
感があります。かうした古蹟も充分吾々の興  
味を惹く點はあります。この二冊で、大體本  
會の行き方は判つて頂けると信じます。  
▽本誌第一冊發行以來非常な好評で、限定部  
數すつかり満員となりました。希くば第一編  
完了迄に中途脱退なく、激勵後援を與へられ  
ん事を再び願つて置きます。  
▽古蹟探訪其他色々御世話になつた方々に  
對し、多忙に取紛れて謝禮の點多々あります  
さうした各位に對し、改めて紙上を以て御厚  
禮申上げます。  
▽裏面廣告の如く「豊後傳説集」を刊行しま  
した處、是又好評にて残本僅少です。吾が縣  
に於てかうした集録は全く是が始めてで、民  
俗學上の好資料と信じます。御希望の方は至  
急御申込み願います。尙將來續集發行の計畫があ  
りますから、本集に洩れた傳説又は收載のもの  
でも異説がありますれば、本會迄御知らせ  
下されば有難く存じます。  
▽又豫告の「増補大友與廢肥」の刊行は今迄

何人も企てなかつた大事業ですが、陽春を期  
して決行致すことになり、目下懸命準備中  
です。購讀者が多ければそれだけ準備が安くなる  
譯です。是非今の内から御申込み下さい。  
限定番號入故、早い申込者に若く番號の本が  
入手される譯です。内容用紙裝釘等充分各位  
の喝采を博する位の美本を作ら自信がありま  
す。  
▽前冊にお願しました「雉城雜誌」第一巻は  
苦心慘愴採集しました。遂に見當らず  
既に本誌には存在せずと迄思つて居すが、尙  
一編の希望を察いで居ます。各位に於ても微  
意を諒せられてお心掛け下さい。愈々見當  
られば更に第二段の計畫があります。次冊ま  
でお待ち下さい。  
▽次にこれはお詫ですが、前冊は種々の手違  
から非常に急いだ爲、校正粗漏で誤植が可成  
ありました。これは便宜上第一編の終(第十  
冊頃)に全部調べて正誤表を附することに  
しましたから、何卒悪しからず。  
▽既に御通知した苦ですが、本會も替替口座  
に加入しましたから、諸代其他御送金は左の  
口座を御利用下さい。  
振替口座 福岡八九六五番  
郷土史蹟傳説研究會

豊府古蹟研究

隔月發行

各冊表紙共四 十頁  
他にコロロイア寫真四圖  
本文九ポイント二段組

第三冊 三月二十日發行

豫定目次

- 一、清瀧山金剛寶戒寺
- 一、神宮寺址
- 一、仙石橋
- 一、蓮菜丘

(寫真) 寶戒寺經堂礎石、傳弘法作不動像、  
神宮寺附近古繪圖、春日赤童子畫像

郷土史蹟傳説研究會編

同 市場直次郎  
市 波多野宗喜  
人 蟻木公一  
十 時英司 (順ハロイ)



郷土史蹟傳説研究会刊書

同人 市場直次郎編

豊後傳説集

全一冊

菊判九ポイント一段組、本文二百二十頁  
郷市別目次、種類別目次添付、コットン紙  
表紙上質ラフ紙凸版一色刷美本

實費 金 壹 圓 (送料共)

三年間の苦心蒐集の傳説約二百種を収載す。本文の民俗學的好文獻たるは勿論、装釘亦清楚古雅の美本。百部限定、殘部僅少。

近刊 増補大友興廢記 (菊判七百頁位)

大友時代の全九州に跨る軍記の大集成本。從來寫本として世に傳へられたが、全四十六卷の大冊にして非常に高價で求め難かつた。殊に増補本に至つては傳本極めて稀。本會此に善本に據つて嚴密なる校合をなし、詳細なる索引を附して刊行することになつた。刊行期日四月頃、實費は三圓乃至五圓、申込の多少に依つて決定。豫め御申込を乞ふ。

「豊府古蹟研究」會費

一回分 金參拾五錢・送料貳錢  
三回分 金壹圓〇五錢・送料共  
六回分 金貳圓〇五錢・送料共  
會費は發行所宛お送り下さい。

昭和六年一月二十日印刷 (會員頒布)  
昭和六年一月廿五日發行

編輯兼 郷土史蹟傳説研究会  
發行所 古代書者 十 時 英 司

大分市南新地四四九

印刷所 大分印刷株式會社

大分市南新地四四九

印刷人 野崎 板 太郎

大分市舞臺町

發行所 郷土史蹟傳説研究会  
振替口座福岡八九六五番

限定出版百五十部

終